

R1年度 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
作曲	教授	久留 智之	研究では海外も含め再演が多くなされた。新作は2曲（ピアノ独奏、無伴奏ソプラノ独唱）。編曲2曲（日本とフィンランドの民謡を題材としたアンサンブル作品）。教育活動では、博士後期課程新入生の研究の方向性について指針をアドヴァイスした。大学運営に関しては、次年度定年になるため次世代への橋渡しを考慮した。
作曲	教授	小林 聡	全ての項目について継続的に努力したと思う。本学の交際交流に関して、タンペレ応用科学大学との協力関係の推進、USCDとの交流には窓口となり、積極的に関わってきた。他の大学・研究機関との連携についても、社会連携センター長として、積極的に要人とコンタクトを取りながら、進めてきた。その他、海外の演奏家を本学に招聘し、演奏会を行った。本学と地域社会との連携についても、本学の特色を生かしながら、地域社会に貢献できる道を常に考えてきた。本学の社会貢献を進めるため、努力をしてきたと思う。
作曲	教授	山本 裕之	研究・教育活動については予定外の活動も含めて概ね順調に行っている。特に「和声学」の教材作成については、実際の授業に導入し検証する作業を継続し、また識者や部会の意見を取り入れながら順調に進め、来年度頭には刊行の見通しとなった。これにより学部の理論系授業改革の一端が実践的に進むことになる。
作曲	准教授	成本 理香	全体的に概ね目標を達成できたと言える。また、2度にわたる外国での研究発表は大きな出来事であった。教育活動の一環として、学長特別研究費によりソルフェージュの新しい教材開発に着手できたことは、本学のソルフェージュ教育の大きな進歩となった。作曲活動に関しては、確かにある程度の曲数を作り出すことができ、評価もされた。しかし、大きなクラス授業を責任者として担当しつつ、専門的教育、自身の作曲、研究、加えて大学運営のための委員会その他、すべてが大事な仕事であるが、あまりにも時間が足らず、綱渡りのようにメ切をこなした感は否めない。
音楽学	教授	井上 さつき	年度当初に計画したことはおおむね実施できた。特に、単著2冊を刊行できたことはうれしく思っている。研究面においては、来年度は、科研費Cの研究のまために注力したい。
音楽学	教授	安原 雅之	研究、教育、大学運営、そして社会貢献。それぞれに、もっと時間をかけて取り組みたい。時間が足りない。
音楽学	教授	東谷 護	就任2年目に、専門の学術書籍を編著者として1冊刊行できたことと、一般社団法人 中部経済連合会・中部圏イノベーション推進機構が主催する講演会に招聘された点においては、高く評価できると思われる。とりわけ、就任2年目に中経連に協力することが出来たのは、公立大学に所属する身としては十分な社会貢献だと言えよう。来年度以降も健康に留意して、今年度以上に研究教育に力をそそぎたい。
声楽	教授	末吉 利行	退職前の1年であったが、演奏委員長として大学運営で最も重要な演奏会における教員の関わり方に重点を置き、合理的かつ積極的な改革をし、学生の演奏意欲を向上させることができた。新たな教員演奏会を立ち上げることができた。また、研究活動を通して積極的に社会と関わり、大学のレベルの高さだけでなく、認知度も高め、社会と大学をより強固に結びつけることができた。
声楽	教授	中巻 寛子	教育活動、大学運営活動に関しては、個々の事案に全力で当たり、一定以上の成果を上げ得たと考えている。特に、今年度は人事委員長の重責があったため、これを大過なく終えられたことに安堵している。また、本年度は演奏会に加えて、楽譜の編纂という、自身の研究と社会貢献を兼ねた活動も行い、これを予定どおりに遂行できたことが大きな成果であったと考えている。

R1年度 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
声楽	教授	森川 栄子	今年度は、自分の専門分野のみならず幅広く演奏発表の機会を得ることができたことに加え、指導の面において大学内部・外部においてそれぞれ成果を挙げることが出来たと考える。また、大学運営面では専攻主任2年目の慣れもあり以前より俯瞰的に業務を行うことができたと考えている。
声楽	准教授	川島 幸子	今年度は、キャラバン企画（地方の音楽高校訪問）が始動し、日々の激務の中、多くの音楽学部の有志の先生方が参加してくださり、実際に2校の音楽科のある高校に訪問出来たことに、心から感謝しております。本当にありがとうございました。来年度以降も続けていけるように、予算が付くことを心から望んでいます。 個人的には、今年度は研究発表（演奏）も比較的充実した活動が出来たと思う。
声楽	准教授	初鹿野 剛	本年度は学内外で研究活動、教育活動に邁進、オペラ、オラトリオ、歌曲のジャンルでそれぞれ演奏が出来た。ただ、広島での細川俊夫《松風》のような現代音楽の仕事は久しぶりで、かなり譜読み等に時間を要した。今後は専門のパロック、ロマン派だけでなく、現代音楽に対してもっと見識を広げていかなければならないことを痛感した。
ピアノ	教授	熊谷 恵美子	自身の研究と教育、大学に関わる運営、社会貢献のどれも私にとっては大切なものであるが、どれも十分ではないのが現状である。特に教育面に関しては、研究との関わりを深めていきたいと考える。
ピアノ	教授	北住 淳	自己点検・評価の取り組みが自らの活動を省察する良い機会となり、研究分野における「変わること・変わらぬこと」をことばで確認することが習慣となっているように感じます。ことばとのある種「特別な関係」を大切にすべき分野なので、この作業の継続は（自分のこととは言え）そこに意味があると思います。
ピアノ	教授	掛谷 勇三	今年度は演奏発表分野での研究活動が1回のみと少なかったが表現に対するアプローチを工夫することができた。学生への指導内容については新たな取り組みを行い、次年度へと繋がる成果があった。技術的基本を習得させる取り組みを始めるとともに、音楽表現における解釈の基礎や、感じたことを音に表すための音色創出の工夫など、より深い表現力獲得のための試みがある程度成功したと考えている。
ピアノ	准教授	内本 久美	一年を通じて国内、国外における演奏活動を通じて研究を深め、教育活動の質の向上に努めた。
ピアノ	准教授	鈴木 謙一郎	今年度はロシアのペテルブルク音楽院の視察はとても有意義なものであった。教員の学生のレベルの高さと歴史あるロシアンピアノの教育は今後自分の教育活動に生かせるものがあると認識した。
ピアノ	准教授	中尾 純	雑用過多が改善されたことにより、心理的余裕をもつことができた。自身の演奏プログラムにおいては例年以上の質・量を達成、教育においても名実ともに学生の成長を実感する一年であった。
ピアノ	准教授	武内 俊之	転任初年度で、新しい環境に慣れて溶け込むこと自体も求められた中、4領域ともに概ね計画・目標に沿った活動を展開し、それを達成することができたと判断している。次年度に向けては、より自分自身のカラーや意思を明確にし、それを踏まえた個性ある活動へと深化させていきたい、と考えている。
弦楽器	教授	福本 泰之	長期・短期外国人客員教授、アーティストインレジデンスなどにより、例年以上に学内で外国人演奏家と接する機会を多く持ち、学生だけではなく個人的にも少なからず良い影響を受けた。また同時に学生への接し方においての改善を実感できた。ただ、学部運営の点では積み残しの案件などがあり反省点もあった。

R1年度 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
弦楽器	教授	花崎 薫	研究活動として今年で30年を迎えたエルデーディ弦楽四重奏団の活動、ベートーヴェンのチェロ作品全曲演奏会、充実した内容であったと思う。短期客員教授としてお迎えしたC・カンギーサー先生との共同作業を通じて氏から得たものは、学生のみならず、教員にとっても意義深いものであったと思う。学生オーケストラの定期演奏会で氏が演奏した、R・シュトラウスのドン・キホーテは心に残る素晴らしいものであった。
弦楽器	教授	白石 禮子	研究活動としてソロや室内楽等の様々な演奏会を行った他、教育活動でも、指導した学生が本学定期演奏会や学外ホール主催の演奏会に出演する等、研究・教育の両面に於いて多くの成果を残した。社会貢献の部分では、チャリティ演奏会出演、コンクール審査員、公開レッスン、オーディション審査等、様々な活動を行った。
弦楽器	教授	桐山 建志	昨年度同様、特に研究活動では大きな成果をあげることができたと思う。また、大学運営でも責任を果たすことが出来たと思う。
弦楽器	准教授	渡邊 玲雄	今年度は赴任2年目ということもあり、1年目より余裕をもって授業一つ一つに取り組むことができた。演奏委員会では初めて副委員長を務めた。多種にわたる演奏会の数々が、盛況に終わることができたのは嬉しい限りだが、もう少し集客面での努力を検討すべき余地はある。 授業においては、修士リサイタルで作曲科の先生や学生と連携して、コントラバス作品の新曲を初演し、ソロ演奏における可能性の拡大に大いに成果をあげた他、室内楽ではコントラバスを打楽器化する場面があり、打楽器の深町先生に聴いていただきアドバイスを仰ぐなど、専攻の枠を超えて先生方と連携しながら授業を進めていける、この大学ならではの強みを感じた一年でもあった。
管打楽器	特任教授	杉木 峯夫	2017年から2020年までの3年間、愛知県立芸術大学の教員として音楽学部・修士・博士後期課程の指導に携わった。公立大学としての目的を達成するための教育活動・研究活動・大学運営・社会貢献など、総合的に見て目標を達成できた。
管打楽器	教授	倉田 寛	今年度は総合的に見ても学生への教育、大学運営、研究活動のバランスが取れ、積極的な活動できたと思う。教育面の成果として、学生達の音楽的技術向上見られ、コンクールやオーディション等に選出されるなど、一定の成果を得ることができた。社会貢献においては、本学の拠点である長久手市と大きな関わりがある長久手市文化の家でのコンサートを積極的に行うことができ、県民市民の方々に芸術を提供することができた。こうした活動を今後も継続し、地域との連携から成り立つ音楽活動を国内外に発信できるよう努めて行きたいと思う。
管打楽器	教授	深町 浩司	研究、教育、社会貢献については非常に精力的に取り組んだ。大学運営についてはコース主任として部会をまとめることができたと自負している。演奏家として舞台に立つ活動に加え、研究成果を本にまとめ著すことができたことについては高く評価できると考える。
管打楽器	准教授	橋本 岳人	研究活動では、多数のオーケストラで首席客演を務めた他室内楽、吹奏楽、ソロ活動とバランス良く行う事が出来た。教育活動では試演会を多く開催したことで学生達が切磋琢磨し、実技試験やコンクール等に良い効果をもたらした他、世界的奏者Eパユ、Pアラニコ氏のマスタークラスを開講し学生に世界レベルの音を体験して貰う事が出来た。
管打楽器	准教授	トン・ブルックス・ノボ	今年度大学で実技レッスン以外に数回海外の講習会に本学の学生を引率した。イタリアの古楽器専門家であるロドルフォ・ラバンカ先生を招聘し個人レッスンとマスタークラスを受け持って頂いた。また、県芸卒業生の田本摂理先生にバスクラリネットと2番クラリネットのオーケストラスタディの指導招聘。

R1年度 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
管打楽器	准教授	井上 圭	設定した目標は概ね達成できた。今後はそれぞれの項目でさらに成果を上げられるように努力してゆきたい。初心者の子供への早期教育にも興味湧いてきたので、資料を集めて取り組んでゆきたいと考えている。
教養	教授	水野 留規	予定していた研究・教育活動を実施し、研究面でのひとつの成果は大学の紀要で公表した。名フィルから依頼されたイタリア近代詩の翻訳にも従事し、演奏会の開催に協力することができた。イタリア語の外部資格試験の実施、イタリア学会における評議員としての活動、文部科学省の留学支援プログラムにおける審査など、いずれも滞りなく任務を遂行した。イタリアのサレルノ大学との国際交流も過去5年間の経験を踏まえて進展させ、本学学生の現地でのイタリア語・イタリア文化研修の支援と相手方学生の日本語・日本文化研修の支援を行った。
教養	教授	三宮 敦生	教育面では、授業アンケートの結果より、学生が十分に満足する授業ができたように思われる。特に、心理学Bでは『非常によい』が83%であった。研究面では、潜在記憶のモデルの研究を深めることができ、教育心理学の授業内容に還元することができるようになった。大学運営面では、図書館業務に対する理解を自分なりに深めることができ、いくつかの提案も行った。社会貢献では、夏休みに本学で開催された、『親子孫でく楽しい仮説実験』講座の運営・実施に尽力し、学外から約30名の参加者を得て、成功裡に終えることができた。
教養	准教授	井上 彩	研究：科研費による助成のおかげで年末にオーストラリアとアメリカより研究者を招聘してハワイ・クレオールをテーマとしたものとしてはおそらく国内で初めての社会言語学ワークショップ・講演会を開催することができた。新型肺炎により国際学会が中止になったのは残念であったがそれ以外は計画通り研究を進めることができた。教育：学生がより能動的に授業に取り組める授業進行を目指した。大学運営：委員会を通じてできる限り取り組んだ。
教養	准教授	大塚 直	令和元年度は、科研費を取得して、現代社会に通じる移民・難民問題について、ナチ時代の劇作家ホルヴァートを対象に精力的な研究活動を行った。また研究成果の一部を、「劇作家ホルヴァートと音楽家ハンス・ガル」と題してシンポジウム＋演奏会を2月に行い、本学学生の生演奏を交えながら広く市民に紹介する予定。
教養	准教授	中根 多恵	研究活動では、理論と実証の両方からの体系的アプローチをめざし、テーマセッションや研究会での議論をととした理論的整理と、質問紙調査の実施をととしたデータ収集・分析に努めた。教育活動では、履修生のニーズに沿いながら興味関心を引き出すための指導方法を追求し、授業展開の工夫に努めた。大学運営では、担当する委員会に出席し、学内外の状況把握に取り組んだ。
教養	准教授	三品 陽平	研究活動および大学運営に関してはおおむね目標を達成することができた。教育活動についても、来年度から教職を志す学生の面接指導を開始できる準備を整えることができた。社会貢献については、少数の現職教員の相談を受け付けることができたが、今後さらに多数の教員の支援ができるように努めていきたい。